

武林名譽錄

五

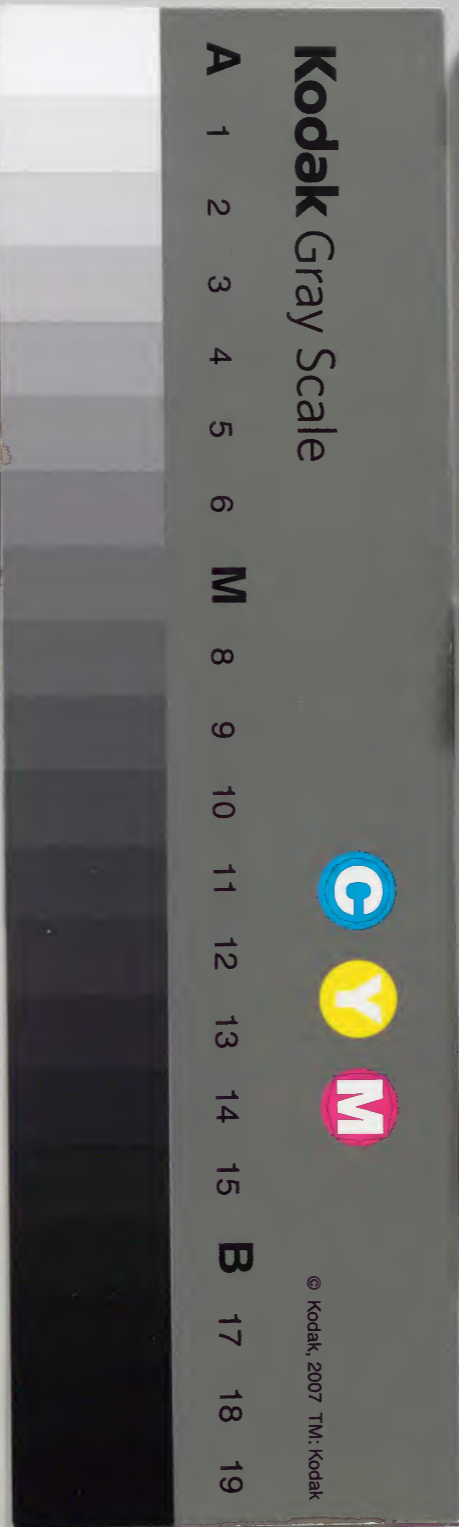
翰談話

庫	文	閣	內
一	函	五	和
五	冊	五	書
架	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 34470
冊數	5 ( 5 )
函號	170 36

新刊本

共五





武林名譽録卷之三 下目録

山中 鹿助幸盛 強盜を捕ふ事

山中 鹿助 累傳

品川 狼助 勝盛と山中 鹿助と 富田川 乃 戦

尾子 孫 口郎 勝久 乃 傳

島津 義久 居向 乃 繪 事

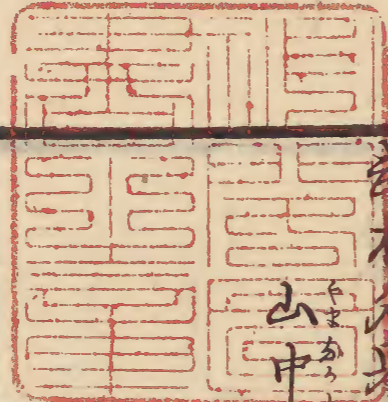
龍伯 法印 同時 乃 繪 師

黒田 勘解由 孝高 武 功 乃 話

如 水 軒 末 期 乃 名 云

馬場 美濃 守信 房 軍 兵 乃 目 付 之 三 一 條

本村 七郎 右衛門 武 功 乃 話





荒木抄津吉村重乃事  
中村新長法武切乃事

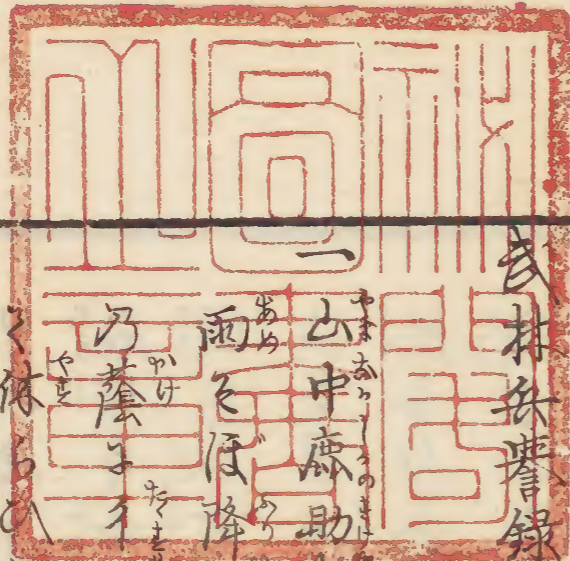
武林名譽録卷之三下 目錄終

武不ノ目

武林名譽録卷之三下

栗原信亮 著

山中康助幸盛近江國馬場驛ふ至里けり日既暮  
雨を降出て宿かき者もかゝ如何に世傳と一樹  
乃蔭下ハ爰も早く老法師と小沙弥二又雨を避  
休らぬ居失早幸盛去乃時回國頃乳を食修行者乃  
躰不出立大進の老法師やく修行者ハ一又旅子や左  
未幾日ハ一からぬ雨々ハ降出ぬ行先いぢかきハ今  
夜ハ我菴室ハ止宿早南去北来乃物語ハ暫時乃疲勞  
を憩め玉ハと云詞々ハ情ふりけ般進ハ幸盛心ハ深  
悦ハ鬼角巾禰子從ハハハと應對去け分程ハ雨









初めは瑞みく舟飯みく舟饗をるるやある疾々出よ  
出ひの為ようありと云あつる庭乃立木の五六尺許  
りあふを以て引起し後打かけく白眼居たり武者共  
初乃勢ふ似もせ以嗚呼誤り重拵か一人餘り不強  
く勞せり菴室を見違へけり去来やとく皆走出  
行方せしら以老法師をくめ所化下部等々息蘇  
りあふちせしと悦ひあふと浪か然不其夜彼  
武者菴室乃前後より二子あ合せり押入たり幸盛ハ  
兼かくあかへしと思ふ床巾やら以ありしとふ  
法師等せハ一間処々忍ませ我身の戸に内乃床板  
引放ち込入ハ落おやうお捕り待居たり大子より

寄し者念かう臨陣にあそ落されし是子をかくを  
ハ見ぬよしふくよみ床板敷からハ縶をくきゆく搦  
手へ向ふく之也ハ窓乃戸を引放ちせよ入んと  
捕へたり幸盛あをを見く為へしやうありと黙識  
窓乃陰手傍身を潜伺ハ居たり寄子ハかくと由知以  
小高き窓み手を打掛延上り形下り處ハ締を引掛て  
傍乃柱を縛付まへく六人あく生捕又又子へ立出床  
板の縶を引除かしく搦子乃者乃援来しと由りもて  
かしあは床乃下より臆々と匍匐をかをあかたへ  
あよと云あし締を頸へ引掛八人にか搦得るきて  
一人は是を亂彈あまへく以邊の野武士より引剥強



遺書 世を渡り者かとはは、一々不頭を刻へる如き共  
菴室乃佛に照覽より、まはる情あく命を斬へる非  
と思還く、互の老法師に如何す為へけん、と問へ、一向  
免し玉へ、と子を搦く云、幸盛さらば放ち遣へ、とく  
締を解あころ、乃任了おゆけと云、とき首領と見ゆ、教  
男幸盛に向ひ、某生落より、乃盗人、おゆひ、は、惟一日  
乃命の過か、く、さ、角、浅、ま、く、業、を、入、為、お、小、借、盗、子  
入、一、と、百、餘、度、丈、小、乃、關、七、十、餘、合、い、ま、く、今、夜、の、如、き  
幸、き、目、不、遇、ひ、く、と、を、覚、え、以、折、御、邊、ハ、誰、人、子、坐、お、や  
御、名、字、出、せ、聞、ま、り、け、也、然、共、今、某、お、と、不、向、く、と、名  
乗、せ、玉、お、ま、く、矢、晴、御、邊、ハ、何、處、お、ゆ、あ、也、思、え、玉、お、ま、く、  
武五ノ三

有ん時、馳参家へ、き、為、お、せ、免、く、去、る、一、許、あ、く、廿、五、へ  
や、と、云、ハ、幸、盛、け、奴、何、を、り、云、班、菴、室、乃、食、客、と、去、く、世  
を、過、せ、我、等、ハ、何、を、り、思、え、玉、お、ま、く、一、詞、を、お、か、お、疾、退、か、  
と、逐、去、ハ、意、殘、け、お、見、還、り、く、出、給、ぬ、然、後、老、法、師、等、由  
幸、盛、を、誅、た、乃、き、一、き、者、了、思、ひ、實、や、ら、お、夜、け、お、お、ひ  
事、田、方、お、聞、え、く、出、雲、浪、人、と、あ、お、よ、ま、お、山、中、鹿、助、お、る  
魚、し、と、云、人、あ、也、ハ、煩、を、一、と、や、思、ひ、く、ん、何、地、と、ゆ、給  
く、立、去、一、と、也、番、場、蓮、華、寺、齋、説  
今、按、お、山、中、鹿、助、幸、盛、ハ、尼、子、家、十、人、乃、家、老、の、一、也  
初、ハ、池、田、甚、次、郎、と、云、天、文、八、年、己、亥、不、生、る、十、三、歳  
お、ま、く、尼、子、修、理、大、使、晴、久、了、傳、お、天、文、廿、永、祿、三、年



十二月晴久は十七歳なり早世せしかば幸盛その  
 長子三郎四郎義久は仕人 幸盛二十歳 義久は後小右衛門  
 督と云義久は利元就と國を争ひ富田七年後城の  
 うち白鹿乃後告志く幸盛と三原源太兵衛久綱と  
 先を争ふくからし橋子我ひ敵御方乃目を驚か  
 又小河内不見守を白鹿乃満願寺に夜討志く譽を  
 顯せし廿八歳乃時形り不利益田乃郎等品川  
 大膳亮の鹿子勝の狼ありとく狼助勝盛と改名し  
 小具足小大弓大雁股をとり添く打お連ハ鹿助赤  
 糸乃鎧了小男鹿又鎖打く角を銀たふしく境  
 入三之尺餘乃太刀乃柄一尺七八寸あふを真向子

義久ノ臣

かざし富田川へさつと打入く狼助ハ馳合んと以  
 時ハ鹿助ハ舊友秋上伊織助鹿を援入く狼乃寧満  
 た分弓弦を射切しかば狼二尺三寸乃太刀あく川  
 中ハ戦入鹿狼を切ハ狼鹿乃膝を切秋上援く狼ハ  
 切川ハ小狼射負た是ハ同ハ時乃事お是と我ハ  
 分ハ永祿九年七月六日義久終り富田乃城を落獲  
 別長田乃圓妙寺へ入玉ハハ鹿助ハ梓築より引別  
 也くお雲國を立退しと形り 廿九歳 然也共内心ハ  
 義久不運入く國を喪入と云と小尾子經久乃血  
 統いゆく全く断絶せし新宮乃式部少輔供久乃末  
 又助四郎とく京都東福寺ハ喝食の躰あくとを取



三々尼子乃家を興たてせりやと思おもひさくも其その頃ころ礼れい乃  
 姿すがたふや川がわの東とう國くにへ下くだ向むかへ或ある日ひ北きた家け乃の軍ぐん法ぽうを  
 窺うかがひそれよ上かみ北きた國くに乃の至いたり越こえ朝あさ倉くら乃の家け風かぜをかつ  
 都みやこへ出いでり一いつと隱ひん徳とく史し年ねん記き了しる見みえく上かみ我われら入い番ばん場ば小  
 至いたり一いつの永えい祿ろく九く年ねん上かみ上かみ後ごと知し也なり上かみ其その上かみ三さん年  
 を經へる永えい祿ろく十じゅう二に年ねん吉きち川がわ元げん春しゅん小こ早はや川がわ隆たか景けい九く列りゅう小こ押  
 渡わたり大だい友ゆう宗そう麟りんと對たい陣じん一いつ所しょ々々小こ合あ戰せん午ご角かく小こ元  
 就あつ輝つひ元げん由ゆう長ちやう府ふ小こ下くだ向むかへ雲くも佈ふ乃の諸しよ將しやう大だいか西さい河がわ上  
 從したがり九く列りゅう小こ赴しゆき國くに中ちゆうに上かみ其その無む勢せい亦また上かみと聞きえ  
 か及およ幸ゆき盛さか也なり天てん乃の尼あま子こ再また興おこせしむ上かみ時とき節せつ亦また失  
 入い庭にわより上かみ以もつて上かみ吉きち田でん八はち郎らう左さ衛ゑ門もん義ぎ全ぜん一いつ小こ眞ま木き宗そう  
 右衛門高たか統ちゆう同どう餘よ市いち立た原げん太たい兵へい衛ゑ久きう綱なう等とう一いつ味み同どう心  
 志しく彼か東とう福ふく寺じ乃の喝かく食じきを還かへ俗ぞくせ上かみ尼あま子こ孫そんに郎らう勝しやう久  
 と我われ秋あき一いつけ上かみ及およ式しき部ぶ少せう輔ぼ誠じやう久きう乃の討う也なり一いつ女にょ廿じふ三  
 年ねん八はち二に歳さい小こ乳ちち母ぼ乃の懷いだり抱いだり也なり備びん後ご國くに德とく分ぶん寺じの  
 僧そう乃の許もと不ふ道どう也なり不ふ思し議ぎ乃の命いのち助たすり也なり乃の明あきら也なり今いま年ねんの  
 十じゅう七しち歳さい小こ亦また上かみ一いつ劍けん術じゆつ早はや業ごう衆しゆ人にん小こ起た過とせし上かみ實  
 由よし尼あま子こ經きやう久きう乃の曾そう孫そん小こ乃の比ひ人にん雲くも伯はくの本ほん立た上かみ上かみへ  
 と舊ふる好この乃の氏し族ぞく馳あつ集ま里り義ぎ復ふく亦また多た勢せい亦また上かみ上かみ乃の奈な佐  
 日あさ半はん助すけ乃の海うみ賊ぞく船ふね小こ取と衆しゆ隱ひん岐ぎ國くに小こ押おり上かみ上かみ隱ひん岐ぎ隱  
 岐ぎ守しゅ乃の情なさけを詔みことら上かみ一いつ族ぞくと云い舊ふる好このと云い忽たちまち亦また同どう心  
 以もつ聽きる周しう吉きち那な原げん田でん村むら勝かつ小こ乃の城しろ小こ取とり上かみ上かみ國くに中ちゆうを平

三々尼子乃家を興たてせりやと思おもひさくも其その頃ころ礼れい乃  
 姿すがたふや川がわの東とう國くにへ下くだ向むかへ或ある日ひ北きた家け乃の軍ぐん法ぽうを  
 窺うかがひそれよ上かみ北きた國くに乃の至いたり越こえ朝あさ倉くら乃の家け風かぜをかつ  
 都みやこへ出いでり一いつと隱ひん徳とく史し年ねん記き了しる見みえく上かみ我われら入い番ばん場ば小  
 至いたり一いつの永えい祿ろく九く年ねん上かみ上かみ後ごと知し也なり上かみ其その上かみ三さん年  
 を經へる永えい祿ろく十じゅう二に年ねん吉きち川がわ元げん春しゅん小こ早はや川がわ隆たか景けい九く列りゅう小こ押  
 渡わたり大だい友ゆう宗そう麟りんと對たい陣じん一いつ所しょ々々小こ合あ戰せん午ご角かく小こ元  
 就あつ輝つひ元げん由ゆう長ちやう府ふ小こ下くだ向むかへ雲くも佈ふ乃の諸しよ將しやう大だいか西さい河がわ上  
 從したがり九く列りゅう小こ赴しゆき國くに中ちゆうに上かみ其その無む勢せい亦また上かみと聞きえ  
 か及およ幸ゆき盛さか也なり天てん乃の尼あま子こ再また興おこせしむ上かみ時とき節せつ亦また失  
 入い庭にわより上かみ以もつて上かみ吉きち田でん八はち郎らう左さ衛ゑ門もん義ぎ全ぜん一いつ小こ眞ま木き宗そう  
 武ぶ又またノ又







均小打後ハ六月廿三日出雲國鳥根郡入部一忠  
山子打上り尾子舊恩乃者を催使せし大庭乃社  
乃大宮司秋上三郎左衛門綱平父子二百餘騎  
一番小馳加たる是を始としし百騎二百騎打以  
打連せ世集也ハ五日ハ内子餘騎小成小け  
里ハ勢を以て回賀左京亮乃孫長乃新山城を攻落  
志末次乃城を築き勝久新山乃常盛ハ末次  
小持保けふ去程小雲列大率尾子乃成返里伯老小  
志大ハ乃衆徒をとり先累代恩顧乃者勝久志を  
運ハ備後國者より其旗乃子小藤乃後ハ中岡元  
志ハ元龜元年正月輝元元春元長隆景一万子

卷六ノ七

騎を率し吉田を發し二月八日不列邑智郡都加  
小着陣せら致勝久出雲ハ入部一之爰ハ九日吉  
川元春雲列飯不郡多之和乃城子押寄一責せ免  
ハは勝久乃頼切夫乃福山次郎左衛門遠氣甚九郎  
川副右京亮叶しと申思ハ今ん城を棄て落し奴  
鹿助自向し味方機後れ志く勝王を得しと思  
以布禰乃郷ハ出發と藝列勢一万子餘騎十日  
布禰ハ乃麓ハ押寄ハ方を圍り攻夫は乃是乃  
味方小還思乃者ありし一陣破也ハは鹿助ハ七  
子騎乃兵裏崩也志く常盛ハ一人幸き命を  
末次乃城ハ之取里末次乃要害を修理し是ハ不指



籠る廿二日元春元長軍を踏之島根郡へ廻り洗合  
口より寄去るは鹿助末次より元春元長軍を踏之島根郡へ廻り洗合  
新山乃城へ逃給る然る元就朝臣老病危急なり  
と輝元隆景元長雲外指縫那平田乃陣を引掛入  
る藝列へ馳返り元春許六又騎ふる生陣出り鹿助  
善隙也と云彼小伯耆備後へ出張去る與力の勢を  
催促せり翌年の元龜二年六月十日元就朝臣七  
十八歳ふあくる辛未あまのりかは毛利家の諸將怨  
斜から以万事を抛擲去る追福乃一會を乃三原と  
ぬき進んと思ひ川ふ元春乃高瀬乃陣ふる元  
就一七日乃追福乃大山乃教悟院を攻破るへい

武元ノ八

定らふ鹿助元春乃大山乃向る後を切んと計る  
油断し有けふ元春乃大山へ攻めると披高  
て打つお途より引返り浸々と宋石乃城を取巻  
時政を責めしかば鹿助防ふ便ぬる宍戸隆家乃羽通  
良久付く降参り元春城を待た其夜鹿助を誅すへ  
す中定ら進るを宍戸に羽頻り元春を宥め請旨  
後かき進り周防徳地千貫乃地を與へ西人小頼ら  
是ハ鹿助乃降参滅了あり只一旦乃命生ん為  
と察せら進る逃をより謀とを鹿助元春乃心を  
探らん爲り四國へ討ち向ると請元春あはれを  
許さし然らば九國乃地を切取る冬せんと請と



聴きよは鹿助爰に於て元春の心を覺り赤痢を病  
里と稱し番乃者を欺り厨乃樋より逃く美作國へ  
立退げたり元龜三年諸處の一揆を駈集め小船  
取乘因幡國巨野郡へ押渡り浦富桐山乃城に取上  
り兵糧澤山に用意し一城乃主との成り也と由  
定りたふ領地おけむる山名豊國乃許へ使を三々  
味方ふ冬より山名乃逆長武田高信を追討せしと  
望しかば豊國大に悦み忽ち合体の約をおしけむ  
ハ鹿助乃威頗る逆郷に振ひ桐山を法美郡鞆山  
引移し高信の城下に逼りて勢を示し八月一日高  
信鞆山に押寄せ攻めんと云共鹿助能防ぎ戦ふは是れ

勝敗軍を追り鳥取へ逆寄り寄り攻めんと高信  
叶たりと思ひ幼女を入質し出り鳥取の城を立退  
鴨尾へ引籠る豊國多年の本意を遂げ鹿助の功を  
厚く賞せんと云と由用りハ志を遂る期あふは  
と思ひけり頃勝久雲列新山を落し京都にありと  
立原久綱乃許より告あし去かば鹿助鞆山乃城を  
棄て京へ馳上り時より信長公上洛乃由を伺し鹿助  
久綱と申連大津乃宿へ出向り柴田明智に付し申  
旨乃有り程に信長對面ありて鹿助の口十里鹿  
毛と云各馬を賜り明智乎手おせ付し去天正元年  
十二月勝久を休せし鹿助但馬國へ下向り又日



許小因列乃城を攻落とせし十三年九月鹿  
助鳥取乃城を落し三年二月新部鬼城を攻落し雲  
列入部の計を廻らんと云共時と機と相應せし九  
月勝久鹿助新部鬼城を出て京へ引返して度ハ羽  
柴筑前守より付く播磨下向し勝久と共佐用郡  
上月城より六年七月より大木乃合戦度々なりし  
不元春隆景數万餘騎より取圍兵糧多く攻支度嚴  
重なりけし是は羽柴筑前守より敵し難しとや思ひ劍  
上月後援乃為り出陣ありし高倉山を引拂ひし  
ハ七月三日勝久自殺し城陷勝久時ハ廿六歳尼  
鹿助ハ元春に對面乃時隙よりあらは刺違ふと思ひ

武ノ十

降を乞ふ城を出る元春其氣を察し更ハ心許あけ  
是ハ鹿助のせん方なり旅宿へ立歸る徳輝元より  
鹿助を備中松山乃陣へ召具し下界へきて中栗屋彦  
右衛門山縣三郎兵衛子下知せらせしよより鹿助  
に十里鹿毛子打乗荒身國行乃刃を佩越後乃惟子  
子足才形より手勢六十餘人と共にお互々から備中  
國甲部川河井乃渡より鹿助馬より下手勢を舟に  
り涉り岩小腰かけ歸る舟を待とく祖ぬいさ汗拭  
ひ居けり處を矢野中務少輔元明の家人河村新左  
衛門岸陰より規寄袈裟掛より丁と切さし由り鹿助  
より思掛り折かれハありと云く河水へ飛下り



を河村續之飛下乃色は庶助取之押伏乃不處へ福  
間彦右衛門駈奔庶助の歎末を纏之引倒し終る首を  
撥く乃り庶助行年四十歳 隆徳太平記云 庶助の郎  
等後夜彦九郎 頭取後柴橋出力介十能我々討死  
以折庶助ハ尼子乃忠臣ハ一々微弱乃單身能數万  
乃衆を動し一度雲別を取是を保さ不王既ハ三年  
不及義久乃憤向を休し經久乃威武を張不是里  
成敗ハ天カ更長短ハ數不里概へきハあら以因利  
ハ一城乃安を棄し其忠を慕入志乃切不關  
將軍乃劉先皇を慕入し似しと云へきハ庶助乃  
ハ別子傳あり

義久ノ十一

一 島津義久乃居間不和傳乃圖畫を書せら教皆惡乃無  
道不之國を亡け家を亡け人乃事蹟なり常不宜ハ  
ハ善事乃五川のま似易く惡事の一川を望く去難ハ  
古乃あしきを乃之耳目不ふ少く世中を裏と心得ぬ  
る時ハ善事ハを乃以ら出来不者形り御子方ハ  
能以公止らせ以見覺あふしと仰らせけ不し文  
武の名將と中不ふへし 太平將士美談

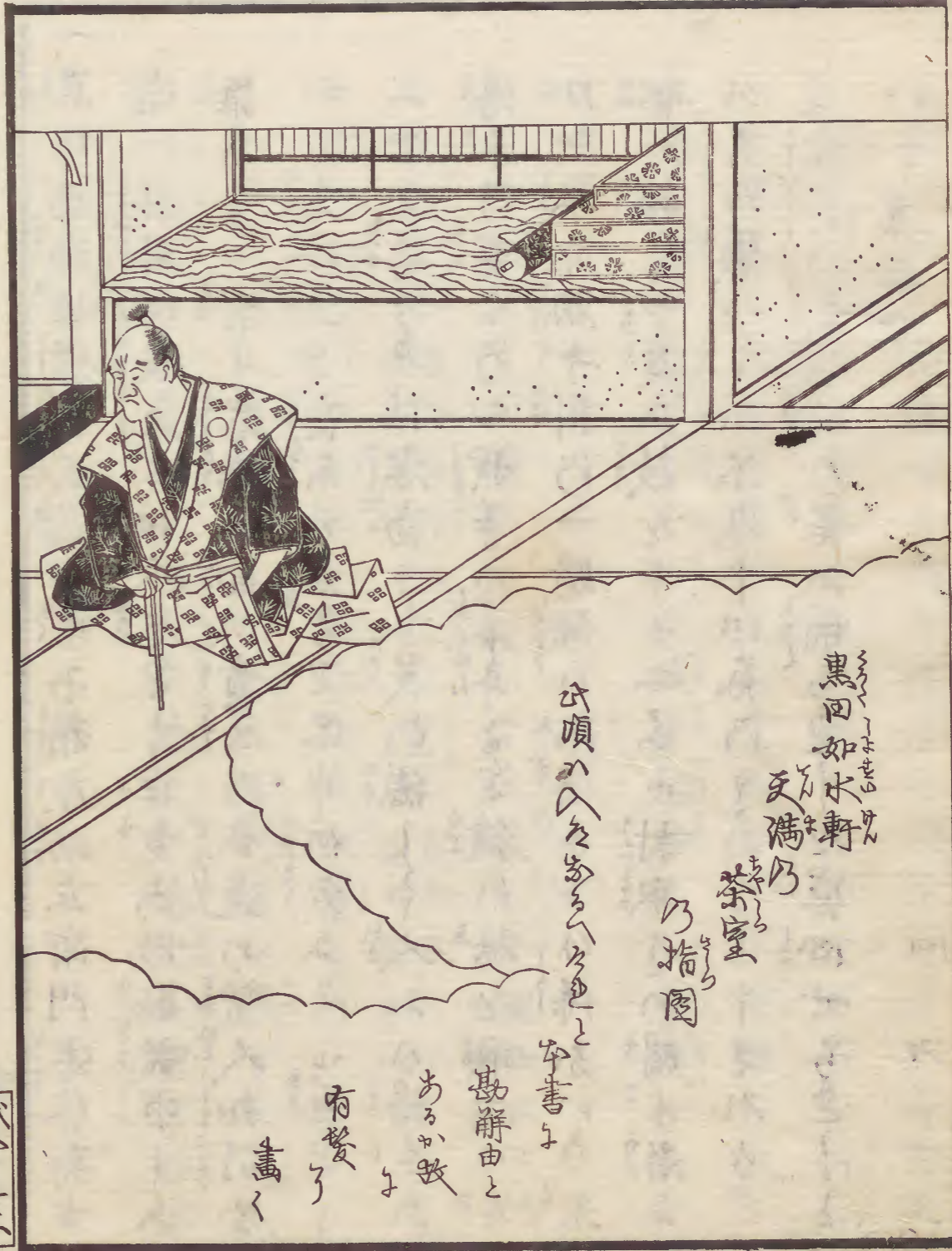
今按不島津義久ハ陸奥守貴久乃長男天文二年癸  
巳二月九日誕生母ハ入来院不見守重聰乃女とそ  
義久女子三人あり男子形り弟兵庫頭義弘を養  
ふく子と以天文六年義久ハ十七歳大友と戦く勝



同十三年龍造寺と戦つ隆信を殺し同十六年豊長  
 園白了聚樂不見冬一掃列播列乃内一万石乃所領  
 を賜ふく在京乃料不充ら也從曰位下修理大夫  
 任了後不難髪くく之位法印龍伯と云慶長十六年  
 正月廿一日七十九歳みく卒以  
 龍伯法印と同時乃繪師ハ古法眼元信龍伯廿七歳  
 松栄直信龍伯六十歳 永徳重信龍伯六十八歳 右系光  
 信歳の時卒以土佐先吉海北友松等なり  
 南浦文集ハ薩隅日三列府君歴代教を載く云義久  
 治國猶超古是時六國臣伏膝以歌鳴世是餘事惟徳  
 被良民歸仁と云上下 異世

一黒田勘解由孝高天満乃宅ハ糟屋助左衛門遊佐新左  
 衛門其外心安元三人冬くく位方ハ乃物語有くハ  
 誰みくハ有く孝高ハ向以貴公乃武邊ハ皆人知所ハ  
 から未由直ハ高名ハ承を里不申何方ハくハ無里ハ  
 不ヤと尋々也ハ孝高ハ美以總くく人ハ不乃得子ハ  
 得子乃有ハ乃ハ我等ハ若年より鐘乃柄を取又ハ冬  
 力を取ク相手掛乃一騎働ハ不得手子ハ併ハから未  
 幣を振くつ度ハ敵を千由二子由討取之ハ得子者ハ  
 以去乃儀つハ不及中ハ存乃ハ形りト中されハ也  
 是孝高乃天姓將乃畧ハ備ら也ハを感心せら也ト  
 中葉某語記





黒田如水軒  
更乃

茶室

乃指図

武順の八ヶ家へてと  
平書

甚解由と

あるか致

有發

畫

武順ノ十三



今按ふ黒田孝高初入小寺官兵衛と云及ハ黒田美濃守識隆と云備前國赤坂郡福岡乃任人黒田下野守重隆乃男かり重隆ハ右近大夫高政乃子ふく黒田氏郎政光乃嫡孫とかや識隆赤松乃小寺後兵衛政識乃手小屬一播磨姫路乃任一けふ後小寺氏とかり政識乃兵を領せし孝高天文十一年丙午歳姫路に生れ天文乃初毛利之好織田四乃三足乃如く勳起し天下乃主將とかふへきと至子鹿を逐ふ時子高孝高之好ハ逆乃家ハ柴入へり以毛利ハ織田乃敵一難くと云く政識の爲子信長子使一木下後吉郎乃英姿拔群かふ王を

武ノ十に

察知し善是ふ交り天文六年羽柴秀吉播磨へ下向有し時孝高向弥陀ら宿へ出迎へ姫路乃城を掃除し秀吉を移らせ中國へ向く弓矢を乞ひし之策を定めし中彼家記ふと也秀吉は十一歳秀吉孝高乃智謀思ひしより由深らむと憑く覺えしよよ盟書を取替し兄弟乃約を爲し中陰徳太平記に書せし是孝高乃第一の未幣と云へし同年十一月佐用城を攻し時孝言先陣に進むと云共既又百餘騎乃將た其子平塚固懋守竹森新次郎ありし佐用乃城を福原某を討捕翌日上月城を討く守真回直家ら家長長船紀伊守二千餘騎あり後



援せしを打破家弟二乃采幣と云へし直家姫路乃  
端城別府乃河内乃城を圍むと聞孝高八百餘騎潛  
み城中入直家乃城乃要害淺向か家を輕里仕  
出守手八子餘騎を追崩し首を取て數百級是より  
去り梶原平三兵衛内右左邊等孝高より頼り姫路乃  
屬以弟三乃采幣と云へし別所長治乃秀吉より及  
家播磨乃諸士狐疑及覆さる者多し孝高更ふ勅せ  
以秀吉の終り大勲を立んとを知其識鑒明徹か  
と云へし其天満乃宅在し慶長六年の後と知  
へし孝高入道如水と稱し五十六六歳の時、糟屋

云々ノ十六

助左衛門ハ七本鍵乃一ふし如水より少き二十  
に歳かき如水慶長九年三月廿日伏見ふ於り卒し  
六十九歳

又云如水末期に筑前吉長政へ遺言せらるるに  
其方ハ我を増たふ如くあり弟一我を信長公秀吉  
公乃御意より遠く三度と頭を剃逼塞せしふ其方ハ  
秀吉公の御意ふし又關東乃御系より弟二ハ我  
ハ一生十二万石 豊前中津 小倉并領 あり其方ハ又十  
万石 取上る弟三我ハ子を下したる働かし其方ハ  
自身乃働きて首を取て三度とあり弟四我ハ其方  
別所公ハ其方ハ別所者なり弟五我ハ其方ハ人



乃外子あり其方ハ右衛門佐忠之甲斐守長興牛久  
助隆政後東と云三男子あり我共我其方ハ増大  
万三二川あり今我死ハ我十二万石乃衆ハ云不及  
之以其方乃勢之殘多く思入ハ其方死之由我生  
之あらば逆之あり如氷居る是は苦一から一と  
云ハ一是其方人遣日ちを故なり今一ハ我博奕上  
手也其方ハ下手ありと云述一也掃聚雜談ハ見也  
長政今年三十七歳なり  
一馬場美濃守信房ハ若き士ハ七人志之何之後學ハ成  
ヘ之を語里云ハと中々述ハ信房答之去ハ戦場ハ  
剛勇と臆病とあり高名不覺ハあると云ハ腹ハ一

ハ心掛ふ之ハ其若き頃より又乃目附を殺ハる是  
去之は餘里不覺を取たふ之ハ如く此と云其又ハ何  
み之也やと問信房答之云一ハ之ハ敵方より味方  
進ん之勇ま之見由不日ハ先を争ハ傷之ハ味方  
臆之見由我日ハ獨進之ハ死去之敵ハ機を付不  
さら之ハ抜掛ハ料を負ハ一ハ之ハ場敷ある味方  
乃士ハ便之親之其人を手本と云其人ハ若ら  
と働之ハ之ハ之ハ敵乃曹乃吹返之俯む之指物動ハ  
之ハ剛敵と知之吹返仰む之指物動ハ弱敵なり  
弱敵を擇之殘付ハ一ハ之ハ是殘乃總先上之たふハ  
弱敵なり總先下之たふハ剛敵なり總先上之たふハ



長柄教養形より長短不同か不皮士能形より士能不掛分  
争ふべし川の敵氣盛か不時の信よりあらへ衰ふるを  
見よ一拍子より突掛かへは是より目付か里と語を  
へ人より馬場より心掛より服せよと云 折井寛書  
今按ふ馬場美濃守信房の駿河守信明乃孫遠江守  
信保乃子か里永正十一年甲戌歳誕生享禄四年午  
八歳より初陣より天文七年廿二歳より武田晴信朝  
臣より仕へたより但其頃より教束衣民部と稱せよと天  
文十二年卅歳より馬場信保乃孫目と形より馬場  
と更む永禄八年三月三日美濃守と改め百廿騎乃  
将たり天文三年又四月廿一日云十二歳より長祿

武田ノ十七

小戦より討死し首をり搦九郎左衛門より従士河井  
二十郎討よりけり寛永系圖より美濃守氏勝と有る  
遠江守信保乃兄と云氏勝長祿より討死せし後其子  
右馬助房勝岩親より後より大田十郎氏房より仕人と云  
遠江端林妙恩寺より日豪上人と中の馬場民部少輔  
景政 後より美濃守 の子か里と彼寺より傳記より見ゆ然  
らに景政と云茶乗よりと聞たり武田より代軍記より永禄  
八年三月三日信字を與より信房と稱せよとあり實より  
然ふみや

一荒木攝津守村重乃士より木村七郎右衛門と云大剛乃  
兵あり守より乃堪より畠山高政乃郎等遊佐方場より佐



小出會大早遊佐長岡八郎剛乃者如也と申候は乃為  
 子只一騎乘有る如く木村不意に起るる敵掛り於る  
 驚き鎧取連々馳向ふ木村踏込鎧を付終る遊佐を  
 突伏首を斬る立揚らんとは不承に河内兵七八人鎧  
 攫く進み來る木村遊佐を討く息喘き勝負を決し難  
 志先也共氣を勵し大音揚接切を始る抄と呼はる  
 乃上子躍り上ふけ考ふ敵兵擡議し是を留ふ心ふ  
 味方乃惣勢はより後手に進ば敵由叶しと申思ひ  
 々ん引名ある依る木村万死を免せし一生を得るり  
 代考ふくんの敵猶縁世に於縁世に去る進ふは重  
 乃為小由討ふへし初夜了力疲也息喘きの後危しと

へる謀りけふと云 我家勲功話

今按ふ荒木孫津守村重家圖りの池田六人衆乃荒  
 木信濃守吉村乃一男といふ吉村乃及ハ安藝守高村  
 と云田原敏左衛門十代波多野次郎義通六代乃孫  
 荒木丹波守朝村乃孫木之助景義乃子四郎長徳重村  
 々々々々細川勝元子仕入重村乃子大義孫家村家  
 村乃子郎吉村形りと見ゆ荒木別記りの秀郷乃末  
 葉守治次郎義定九代後胤曾祖父安藝守大永七年  
 桂川合戦了我死し其子大孫大輔ハ丹波守佐了け  
 るる後小ハ務津國豊島郡坂根と云ぬる後更佐了  
 乃乃子信濃守義村と云郎村重乃及形りと云更文





畠山高政と云は播磨守政國乃長子少く管領從三  
 位政長卿乃玄孫也里矢正仁年十月十日卒去之  
 孫也及村重と戦ひし天正元年氣乃事と知へし  
 本村の聲を揚ぐ敵を勝しと知くかを何と松永彈  
 正久齋り出し中村新兵衛と云長あ軍出か上  
 子狸々那乃羽織小唐冠乃曹を著く何と勝也大子  
 鐘を顯し去か上鐘中村と呼也大か上又佛合我  
 乃前の日傍葦子水形か上あ望されく羽織と曹を  
 負た上志は其身ハ別の装束志く我場子向ひ  
 るふいひ水刃例乃唐冠よとく逃走けか上今日ハ  
 見馴さかお志か上ハ競ひ掛く変倒し獲り首を捕

武文ノ十九

也々上是敵を殺さ乃多少子依く勝負各別あか上  
 あく威を揮し勢を奪入を以く勝を制さかを見  
 愈し然らハ戦ハ氣勝ああ里と山本道鬼乃兵書ハ  
 記せし由理なりと知へし



武林采録卷之三下終







